

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381083

研究課題名(和文) 芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践体系の構築

研究課題名(英文) Construction of Curriculum Based on Integrated Natural Experience by Arts Practice in Early Childhood Care and Education

研究代表者

笠原 広一 (Kasahara, Koichi)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：50388188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は幼児教育において自然を豊かに感じる感覚的な体験を、芸術活動の媒介によって具体化(可視化・共有化)し、体験をより深く味わい、自然に対するイメージや思考を深めていけるような、感性的体験を基盤とした幼児教育実践体系の構築を目的とした。

全国各地の幼稚園と保育園、ワークショップや大学での演習、協力園で活動を行い、「自然体験の理解と位置付け」、「自然体験と芸術活動の関係」、「体験の重層化と生態学的情報の探究」に係る実践理論(11の知見)と、感性的体験の媒介によって自然体験、生活文化、芸術活動、保育者と保護者の協同、地域との連携が有機的につながる幼児教育の実践体系(概念図)を生み出した。

研究成果の概要(英文)： This research made clear the system of theories and practices as a Curriculum Based on Integrated Natural Experience by Arts Practice in Early Childhood Care and Education. These practices enable young children to feel deeply with their senses and body, and the theories make the experiences visible. It was conducted by a field research at eleven kindergartens and nursery schools, workshops in/out of Japan, practice and seminars at universities, and collaborative practices with a nursery school.

As a result, specific insights on "foundation and understanding of nature experience," "relation of nature experience and arts experience," and "multilayered experience and inquiry of ecological information" were produced. These insights and case practices form into a curriculum that links nature experience, life culture, arts activities, collaboration between teachers and parents, and cooperation with the community by the mediation with an experience domain of organic sensibility.

研究分野：美術教育

キーワード：幼児教育 芸術教育 自然体験 感性 領域表現 領域環境 美術教育 Arts-Based Research

1. 研究開始当初の背景

自然体験は人間存在の基盤となる活動である。保育における自然体験は、生活の中での様々な場面での自然との「ふれあい」や遊びをとおした「体験」という形でなされる。しかし、自然体験をそうした生活の中で連続性や全体性をもったものと考えるとき、体験の実相を捉え、自然体験をとおして子どもの中に育まれるものを理解していこうとすると、その体験理解の難しさに直面する。

保育者は自然体験が子どもにとってとても大切なものであることを経験的に理解しているが、そうした体験を保育全体の構造に位置付け、理論として言葉で捉え、説明することは容易ではない。また、東日本大震災での人や自然環境の甚大な被害は、ESD の理解と取り組みが進む中で、あらためて私たちの自然に対する向き合い方や文明のあり方、次世代に対する責任などに大きな課題が突きつけられていることを痛感させるが、環境教育やESDをふまえた幼児教育実践が十分に広がっているとは言えない(井上2009)。

多くの人々は素朴に「自然が好き、自然を守ることは大切」と思っているのではないだろうか。そして全国ほとんどの幼稚園や保育所が自然とのつながりを感じられる保育実践に取り組んでいる。しかし、それが生涯の基礎となる自然との共生の感覚を育み、実際生活の中で持続可能性や共生を意識した選択を動機づける基盤となる感受性を育てているのかどうか、我々はそうした自然体験のあり方について問い直してみる必要がある。

幼児の全面発達にとって自然体験は欠くことのできない基本的活動である(田尻・無藤2003)。では、自然体験をベースとした保育実践のカリキュラムではどんな保育や園生活が営まれ、子どもたちの中に何を培うのか。幼児期は実体験や自然との具体的かかわりをたっぷり体験することが必要であり、その具体性自体が重要な価値を持つ。幼児にとって自然体験は、世界と出会い心と体が動く、重要な感性的体験である。

そこで、保育における自然体験や環境教育、自然に根ざした生活文化などの自然とのつながりを持った活動を、自然体験と同様に体験の「感性」的な位相を基盤とする「芸術活動」によって統合的に扱っていく保育実践のあり方を検討する。自然体験や環境教育において感性は自然観を育む原体験において重要であり(井上1996)、幼児期は感性的な認識としての体験に大きく依拠する時期でもある。体験の感性的位相とのその媒介性に着目することで、自然体験と芸術活動が統合的に媒介され、より豊かで創造的な園生活と自然体験の充実が、そして保育実践のあり方が見出せるのではないかと考える。

2. 研究の目的

こうした問題背景から、本研究は保育実践において自然を豊かに感じるという感性的

な体験を、芸術活動を媒介させることで具体化(可視化・共有化)し、体験をより深く味わい、自然に対するイメージや思考を深めていけるような、感性的体験を基盤とした幼児教育実践体系の構築を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究方法

こうした研究目的に対し、まず文献資料を基に幼児の自然体験に関する理論的仮説を生成し、それを踏まえながら全国の幼稚園や保育園等で調査を行い、実践事例や実践理論に関する情報収集を行った。

同時に関連するワークショップや海外の実践・研究の調査を行い、芸術活動による統合的な自然体験についての理論構築を多角的に進めた。

勤務校での演習、教員研修、協力園での実践をとおして、実践と理論を往還させながら具体性を持った研究を推進した。

これらの取り組みをとおして、芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践体系の構築を図った。

(2) 調査対象

調査及び実践対象等は以下の通りである。

① 幼児期教育施設

〈北海道地区〉

札幌トモエ幼稚園、大地太陽幼稚園

〈東北地区〉

東北芸術工科大学こども芸術大学

〈関東地区〉

木更津社会館保育園

〈関西地区〉

たかつかさ保育園、そよかぜ幼稚園

〈四国地区〉

済生会松山乳児保育園

〈九州地区〉

大矢野あゆみ保育園、もぐし保育園

まくらざき保育園、小鳩の家保育園

② ワークショップ調査及び実施

・「幼児の絵の創造性と生活体験—美術教育史をふりかえり、描くことの今日的意義を考える」(講演・ワークショップ)

・「にじいろぱれっと・えんそくワークショップ」NPO 法人東北の造形作家を支援する会(SOAT)と東京学芸大学の協働事業

・福島現代美術ビエンナーレ「〈ほんとの空〉を園庭に」(ワークショップ)(富田幼稚園)

・2016 国際芸術教育サミット・ワークショップ in 杭州「協働的なコンセプトマップづくり」

・Workshop on Arts-Based Research「フェルナンド・ヘルナンデス教授によるワークショップ—統合的な芸術体験の理論と実践の理解に向けて—」

③調査対象（授業等での実施）

・福岡教育大学、宮崎国際大学、宮崎学園短期大学、東京学芸大学での幼児教育科目等

④協力園での実践

・学芸の森保育園との連携造形活動の実施

4. 研究成果（知見のまとめ）

上記施設でのフィールドワークやインタビュー、ワークショップ、大学や協力園での実践から、幼児の自然体験と芸術活動の媒介による統合的な保育実践を構築する上で重要となる3分野 11件の知見と結論が得られた。

〈1. 自然体験の理解と位置付け〉

（1）自然体験の記憶とかたち

自然体験は日々の生活体験の中での意識的・無意識的な体験の実感や記憶などのイメージ（表象）が重層的に蓄積し、統合された表象（Integrated Representation: IRs）」として捉えることができる。それは体験の強い情動によって、または、じっくりと繰り返す日々の体験の蓄積によって定着する（日光写真の印画紙のメタファー）。

（2）自然体験の多感覚性と立体性

自然体験のあり方と記憶は、立体的で多感覚的であり、体験の地と図を非分別的に主客溶解の体験として一体的に「生きる」、生の充実としての生成的営みとなる。

（3）日常性の中の自然体験の位置付け

日々の生活の中での自然体験によって子どもはその風景や場の一部となり、風景や場を自分の一部の様に感じるようになる。日常の中に当たり前にあること、四季折々の自然と共に「過ごす」体験が深く記憶に刻まれる。

（4）自然とのかかわりと環境への視点

自然とのかかわりの中で育まれる自己決定の視点や、自然体験を言葉で理解する学習とは異なる、体験自体の生きられ方や深まりを意識する視点が重要である。そうした自然体験を可能とする園環境と保育への視点、体験のあり様を捉えることが保育者の役割である。

（5）自然体験を手渡す保育者の視点

保育者はそうした視点で、子どもと共に自然体験の感性的認識にじっくり留まりながら、それを深く味わい、「体験」そのものに出会わせ、自然体験を手渡すのである。子どもの様々な姿や反応、会話やエピソード、場を共にする中での間主観的な感受認識から子どもの体験を捉え、次の保育と自然体験への循環的なサイクルを生み出していく。

〈2. 自然体験と芸術活動の関係〉

（6）芸術表現による生成的変容

多感覚的で立体的な自然体験を知的認識（対象化）によって概念的に理解するのではなく、自然事象と子どもとの複雑なかかわり合いの固有性を、芸術表現の媒介によって統合的に扱い、深化、昇華させていくことができる。それによって自己と自然のあり方や意味や価値が変容していく体験が起こる。それは自己と自然との間に創造的に生成する「生の探求」となる。

（7）自然体験の多感覚的な探究方法

多感覚的で立体的な自然体験の持つ固有性は、絵、粘土、音楽やダンス、詩などの芸術表現の媒介によって、対象との間に起こる感性的認識に深く留まりつつ、体験（知覚）と認識の間の深い探究に進むことができ、子どもにとっての自然体験の深化・充実を進めていく取り組みが可能となる（図1）。

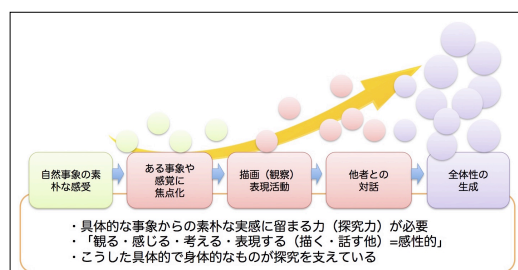


図1. 自然体験の様態と実践のサイクル

（8）多様な自然と芸術活動の取り組み

昇華による生成的変容、アーツ・ベースド・アプローチ、日々の園生活に根ざした探究と創造を軸としたアプローチなど、幼児の生活体験の中にある自然体験にまつわる芸術活動を保育の中心的手法や実践理論として位置付けている園がある。

また、歴史や文化等の地域コミュニティとのつながりを基盤とするアプローチや、自然とのふれあいや遊びが育む五感やからだ全体での体験を軸に、造形以外の多様な芸術的アプローチを含むものなど、体験を媒介する多様な方法やアプローチの一つとして芸術活動を位置付けている園もある。

そして、シンプルに自然と向き合う日常性の中で、自分を自然の中に、自然を自分の中に感じるような、自然と「過ごす」中での感性的育みを重視するアプローチといった、日々の園生活での感性的認識として広く芸術的な視点や感受性を捉えている園もある。

これら三つの視点は園毎に融合の仕方やウェイトも様々であるが、保育における自然体験と芸術活動の関係を考える上で手がかりとなる。こうした幅は幼児教育において芸術が果たし得る可能性の幅を示している。幼児教育における「芸術活動」という言葉は、こうした生活の中での体験と多様な感性的認識や探究の一連の取り組みを表している。

(9) 芸術活動が媒介統合する仕組み

アーツ・ベースド・アプローチにみる芸術活動による自然体験の媒介と統合的な探究の構造は、自然体験の「素朴な感受認識」から「ある事象や感覚に焦点化」が起こり、「描画（観察・表現）活動」によって具体的な事象からの素朴な実感を感性的認識において探究し、「他者（や自己）との対話」によって、自然体験を感受し捉える気づきの「接点」が増え、多感覚的で立体的な体験の「全体性の生成」が生まれるという展開構造を持つ。

〈3. 体験の重層化と生態学的情報の探究〉

(10) 生活体験の重層化と表現

自然環境のなかでの直接体験を重ねた子どもたちは、固有の生についてのリアリティを深め、それぞれの生のリアリティを表現しあう関係のなかで、経験を共有していくことができる。個人が得た経験の共有の可能性を探り、個々の表現を通してより豊かなコミュニケーションを作り出していくことで、個の生活と集団の生活をつなぎ、ひとりではできない体験ができる場、仲間との生活を通じた成長の場をつくることができ、ひとりだけの生活とは異なる生のリアリティが生まれる。

そうした子どもたちの印象に残り蓄積されていく体験とは、非日常的で特別な体験としてもたらされるときもあれば、生活のなかの「ありふれたもの」に新たな仕方では出会うようなかたちで、日常生活のなかで生じていくこともある（山本 2015）。そうした個々の体験から生じる子どもの表現を受容し、応答していくことで、自然体験や芸術体験が重層的に深められていく生活を通じたカリキュラムが生まれる。

(11) 直接経験という生態学的情報の探究

環境に存在する情報のなかで人間が知覚できているのはごく一部であり、環境は知覚の限界を超える多様な情報に満ちている。それが人間に意識されていないにも関わらず、身体に影響を与えているケースもある。自然が与えてくれる恩恵は、私たちの認識を超えた奥行きをもっており、経験というものが、私たちひとりひとりが独自の仕方では生態学的情報を探索することに基づいて生じているという理解が重要である（リード 2010）。

現代では幼児の生活に様々な処理情報が入ってくることは避け難いが、幼児期は直接経験の機会を保障し、言語以前の多様な情報を自らの仕方では精査し、それぞれの子どもの感じ方で世界を経験していく豊饒な生態学的情報をもつ環境のなかで深められる体験が重要である。それが子どもの内発的な表現や生のリアリティの基礎を作っている。間接経験の充実の前提となる直接経験を充実させる生活が求められる。

〈4. 結論〉

幼児教育における自然体験を芸術体験の媒介と統合によって考察することで見えてきたのは、言語化しえない深さを持つ自然体験を多感覚的で立体的なもの、重層的な体験の表象として記憶や身体に刻まれるものとして捉え、自然体験が子どもの内発的な表現を生み出し、芸術表現の媒介によって生命的なリアリティを伴う生の充実感を感じる経験が生まれ、深まっていくということである。こうした取り組みは子どもだけで作り出せるものではなく、保育者などの大人が子どもの生活体験に寄り添い、環境や体験との出会いを手渡していくことで可能になる。そうした取り組みを理解し実践していくための体験理解と実践方法の方途をここまでの知見が示している。

そのことをふまえ、「芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践」に取り組む際の、幼児の生活体験、自然体験、芸術活動による媒介、といった実践全体の「体系」を図2（次頁）にまとめた。

①自然体験の実践領域

まず、基盤となるのは図の下半分にある「自然体験」の実践領域である。活動の内容は「自然体験のあり方」などは、図内と上述の知見で詳細を示した通りであるが、こうした日々の環境としての、環境の中での意図的、非意図的な自然とのかかわりが、実践体系の基盤となっている。その中でも事例として特徴的なものを図内に例示した。

②生活文化の実践領域

次に図中央の「生活文化」の実践領域である。衣食住を通して日々当たり前のように接する自然のあり方とは何かを、事例も含めて示した。自然体験も含め、生活文化は地域ごとや環境、立地等によって特色や制約などもあるが、それぞれの地域の文化や特性を生かした生活文化や自然とのかかわりが工夫され、保育の様々な活動と連動しながら盛り込まれていた。

③芸術活動

そして図の上部にある「芸術活動」は大きく三つの方向性を持つ。「描画・自然素材の造形」活動への取り組みでは、活動による子どもの知覚や心身の発達や育ち、心情の表現、自然素材での遊びと芸術活動とが行為レベルでつながっている描画活動をとおして、子どもの育ちを促し、保育者が育ちを捉え、それを保護者と共有し、子育て支援につなげていく「表現と理解を軸としたアプローチ」が採られている。

「多感覚的な感性的探究」はアーツ・ベースド・アプローチともつながり、様々な芸術表現を用いて、自然体験や事象に対する多感覚的な探究を行う。地域の歴史や文化も含めて多面的に取り組んでいくもので、自然との

芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践体系

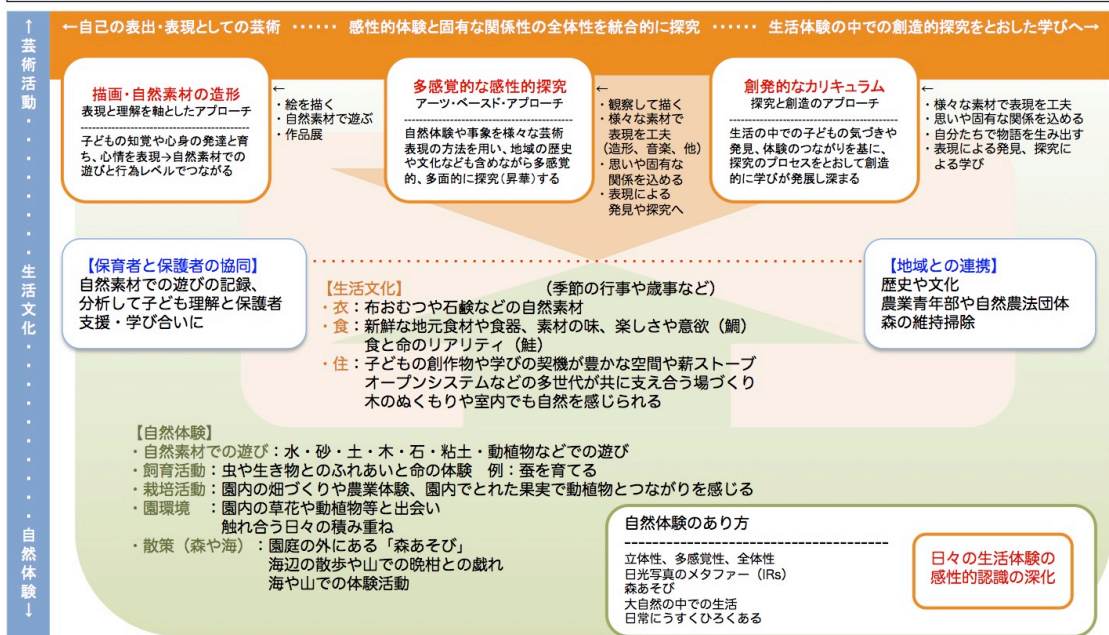


図2. 本研究が提起する幼児教育実践体系

固有な関係性は時に芸術表現をとおして昇華される。

「創発的なカリキュラム」は、生活の中での子どもの気づきや発見、体験のつながりを、探究のプロセスをとおして創造的に展開し、学びへとつなげていくカリキュラムを持つ。活動の展開は子どもの自発性や主体性を軸に行われるが、保育者はその展開可能性を捉えながら、発見や学びがより深まるように、子どもたちと協同しながら、より明確な意図を持って活動を進めていく。

そして多くの園ではこれら複数の方向性を含みながら活動が行なわれている。

(4) 保育者と保護者の協同

こうした取り組みは、保育者による体験理解をとおした子ども理解と保育の見直しにつながり、それが子育て支援や親との協同的な学びにもつながる取り組みと連動することで、循環的に実践が深まっていくのである。

(5) 地域との連携

こうした自然体験の基盤となる環境、生活文化、芸術活動、保育者や保護者の協同的な学び合いは、その土地の歴史や文化、各種団体など、地域との連携によってより深く、息の長い持続的な取り組みとなる。こうした取り組みをとおして子どもや保護者も地域ともつながっていくことができるのである。

以上が、「芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践体系」となる。全体としてみれば、自然環境や生活文化、芸術活動、保護者や地域連携など、ごく当たり前の要素に思えるが、そこにある自然

や自然体験という環境的基盤からの日々の影響(恩恵)を子どもの体験の姿やあり方をとおして理解し、それが感性レベルでの体験の媒介をとおして衣食住の生活文化や、芸術活動への展開のあり方を詳細に捉えることで、これまで曖昧で漠然と捉えてきた幼児教育における自然体験のあり方を、環境と生活と文化的実践との間の有機的で具体的なつながりとして可視化することができた。このことは本研究の大きな成果である。

もちろん「何を行うか」という内容の例示だけでなく、それが「どんな体験なのか」「どんな体験理解のあり方なのか」についても、豊富な事例と理論的考察によって示しており、それぞれの現場の取り組みを本体系に照らして見ていくことで、自身の保育の捉え直しや次なる可能性の模索にも役立つものと考えられる。今回は自然体験と芸術活動という広がりのある視点の間の統合に視点を置いたこともあり、自然体験と生活文化、生活文化と芸術活動、保護者の学びなどについては、今後詳しい調査が必要である。また、幼児教育における芸術活動の国内と海外での考え方の違いなども更なる検討が必要な部分である。それらの点は今後の検討課題としたい。

〈謝辞〉

本研究では多くの幼稚園、保育園の園長先生をはじめ教職員の皆様、保護者の皆様、ワークショップや講演の講師の皆様、学生・院生にご協力を賜りました。研究メンバーの勤務校(研究代表者: 元福岡教育大学、現東京学芸大学、研究分担者: 大阪樟蔭女子大学、元九州大学総合研究博物館、現宮崎国際大学)の教職員の皆様にも多くのご協力をいただきました。あらためて御礼申し上げます。

〈引用文献〉

E. リード (2010) 『経験のための戦い—情報生態学から社会哲学へ』、菅野盾樹訳、新曜社。

井上美智子 (1996) 「保育における自然教育のあり方について—環境教育の視点から」日本保育学会大会研究論文集 (49)、日本保育学会、70~71。

井上美智子 (2009) 「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」、環境教育、日本環境教育学会、VOL. 19-1、日本保育学会、95~108。

田尻由美子・無藤隆 (2003) 「幼稚園・保育所における自然環境と「自然に親しむ保育」の実態について」、日本保育学会大会発表論文集 56、日本保育学会、420~421。

山本一成 (2015) 「『ありふれたもの』からの教育—生活に潜在する生成体験のメディアについての考察」、『生活体験学習研究』、第 16 巻、47~56。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 7 件)

①Koichi, Kasahara. (2016) Children's Paintings Based on Dynamic Experience of Activities in Nature: Embodiment of Vitality Affect in Visual Art. 2016 SAEK (Society for Art Education of Korea) International Conference Proceedings, Hanyang University. Society for Art Education of Korea. Seoul, Korea. 310-318.

②山本一成 (2016) 「『ありふれたもの』からの教育—生活に潜在する生成体験のメディアについての考察」、生活体験学習研究、(16)、日本生活体験学習学会、47~56。

③Koichi, Kasahara. (2015) How Students Learn an Arts-Based Approach to Early Childhood Education. Critical Approaches to Arts-Based Research: Special Edition of UNESCO Observatory refereed journal, Multi disciplinary Research in the Arts, UNESCO Observatory, Faculty of Architecture, Building and Planning, 1-26.

④山本一成 (2015) 「保育における「そこにあるもの」の価値—アフォーダンス理論の自然実在論的解釈を通して」、大阪樟蔭女子大学紀要、(5)、大阪樟蔭女子大学、43~52。

〔学会発表〕 (計 18 件)

①Koichi, Kasahara. (2016) Collaborative Map Making for Exchange of Participant's Insight on Art Education (Workshop). 2016 World Arts

Education Summit Conference Manual, 2016 World Arts Education Summit, The Chinese Society of Education and World Alliance for Arts Education, Zhejiang Conservatory of Music, Zhejiang, China. (2016 年 12 月 4 日)

②Mai, Sakakura., Koichi, Kasahara. (2016) Children learn about environmental problems from a nature of Japanese view: An example from a nursery school with a distinctive natural environment. 2016 International Conference of East-Asian Association for Science Education, East-Asian Association for Science Education, Tokyo University of Science, Shinjuku, Tokyo, Japan. (2016 年 8 月 26 日)

③坂倉真衣, 山本一成, 笠原広一 (2016) 「幼児の生活文化と持続可能性」、日本保育学会大会第 69 回大会、日本保育学会、東京学芸大学 (東京都小金井市)、(2016 年 5 月 8 日)。

④ Issei, Yamamoto. (2015) How do we experience the reality of life? : Consideration of educational opportunities in nature and cultural activities. Pacific Early Childhood Research Association 16th annual conference, Macquarie University, North Ryde, Australia. (2015 年 7 月 24 日)

⑤ Koichi, Kasahara. (2015) Collaborative Artwork based on Experiences with Nature in Early Childhood Education, The 6th International Art in Early Childhood Conference Art: Home, School, Communities. Proceedings. The 6th International Art in Early Childhood Conference, Hong Kong Institute of Education, Hong Kong, China. (2015 年 6 月 13 日)

⑥山本一成 (2015) 「生活のなかで日常を超える—環境との出会いと自己変容についての理論的検討」、日本生活体験学習学会第 16 回研究大会、九州大学 (福岡県福岡市)、(2015 年 2 月 1 日)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠原 広一 (KASAHARA, Koichi)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：50388188

(2) 研究分担者

山本 一成 (YAMAMOTO, Issei)
大阪樟蔭女子大学・児童学部・講師
研究者番号：70737238

坂倉 真衣 (SAKAKURA, Mai)
宮崎国際大学・教育学部・助教
研究者番号：70758606